人文フォーラム

30

2009.3

CONTENTS

巻頭言
研究素材について
人文学部長　追塩　千尋…… 1
第 8 回 カナダ・ブロック大学研修旅行報告
本城　誠二…… 2
ロシア語弁論大会 …… 7
Essay
「読む」ことと「書く」こと
安酸　敏眞…… 8
ゼミ室紹介
1 部　英米文化学科　桑原ゼミナール……10
第 16 回 市民公開講座報告 ……12
大学院の窓
チャンス＆チャレンジ
文学研究科　英米文化専攻
修士課程 2 年　水口美知子……13
研究、その足跡 ……14
編集後記 ……17

北海学園大学人文学部

巻頭言

研究素材について

人文学部長　**追塩　千尋**

30年ほど前になるが、日本中世史の大家であった宝月圭吾氏（故人）の桝に関する講演を聞く機会があった。私は度量衡の問題には関心がなかったので参加は気が進まなかったが、予想に反して得るところの多い講演であった。桝の形態などに関する説明は色々なされたが、無味乾燥な形態論ではなく、話の内容が歴史の本質に迫るものであったからである。すなわち、その時々の為政者にとって重要なことはいかにして税を取るかにあり、前近代において桝は税を計るための基本的な道具であったので、その形態論は歴史の本質そのものに関わるのである、ということであった。桝という小さな窓口を通じて大きな歴史の世界を論じた話だったのである。そして講演の締めくくりとして語られた「歴史を研究する素材はその辺にいくらでも転がっているのですよ」、という言葉が極めて印象的だった。

私はこの講演を聞いた後、当時関心を持っていた鎌倉時代の説話集である無住の『沙石集』に思いをはせた。『沙石集』はそこら辺に落ちている沙・石から砂金や金剛石を得ることが出来るのと同様に、世間に流布している説話（沙・石）を通じて人々を仏法（金・金剛石）の世界に導こうとして、沙・石にあたる説話を集めて編纂された説話集である。その後、私の関心は無住が人々に示そうとした仏法の世界の解明、という課題に移っていったのである。

私たちは日常生活上のことは、さほど突き詰めて関心を寄せたり疑問を抱いて探究する、ということはしないものである。しかしながら、ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見したように、理系・文系の分野を問わず、ともすれば見逃してしまうような事象に関心を寄せ追究していく、という姿勢は重要なようである。宝月氏の講演は歴史学の分野でも同様であることを教えてくれたのである。

このフォーラムが刊行される頃は、卒論・修論を仕上げて無事卒業・修了した学生諸君はほっとしているであろう。一方、これから卒論・修論に取り組まねばならない諸君は、何をどう取り上げたらよいのか思い悩んでいるのではないだろうか。確かにテーマ設定は厄介である。関心のある分野の勉学を深め、その結果必然的に追究すべきテーマが浮かび上がってくる、というのが正攻法で望ましい方法なのであろう。しかし、身近な素材に目を向けてみる、ということも試みてみたらどうであろうか。まともに考えてみたことも無いような素材に、物事の本質に結びつくようなテーマが隠されているかもしれないし、意外に展望が開けるかもしれないからである。

例えば、「左」が付く熟語にはなぜ左遷・左前などのようなマイナス的な言葉が多いのか、地図はなぜ北を上にするのか、なぜ船には「～丸」という名が多いのだろうか、などといったことである。「左」の問題は「右」との比較の中で考えねばならないし、地図の場合はともかく手元の地図をあれこれ角度を変えて見ることをお勧めしたい。思わぬ世界が見えてくるはずである。「丸」は楽器（笛など）や幼名に使用されることとも関連する問題といえる。

これは近年のみの傾向ではないが、学生諸君は勉学上においては「教えてもらう」といった受動的姿勢が強く、何事に対しても好奇心・探究心を持つという主体的・能動的な側面が不足しているように思われる。些細なことでも疑問を抱き、その疑問を解明していくという姿勢を育んでいくことに努めて頂きたい。その疑問も辞典類を引けば判る様な通り一遍のものではなく、色々手を尽くさねば解けないような疑問へと成長させて欲しい。前述のいくつかの疑問は、辞・事典だけでは解決できないし、解明のための参考文献を探すこと自体が大いなる勉強になるはずである。そうした作業を行う中で自己の勉学上の目標が定まり、ひいては卒論・修論のテーマも決まるかもしれないからである。そうしたテーマこそが、地に足が着いたテーマとして興味を持って取り組むことが出来るのでは、と思うのである。いくら学問上で解明が求められている（あるいは論点になっている）重要事項ではあっても、興味が湧かないテーマに無理に取り組む必要はないのである。

第8回カナダ・ブロック大学研修旅行報告

ブロック大学での有意義で楽しかった日々

引率教員 英米文化学科　**本城　誠二**

2008年度人文学部「国際文化演習」の研修先であるカナダのブロック大学に向けて、学生23名、引率2名は9月1日成田空港を出発し、12時間のフライトを終えてトロントの国際空港に着陸し、その後バスで無事ブロック大学に到着した。大学のプログラム担当者とホームステイ担当者に会い、学生たちはその場でホームステイ先のファミリーに紹介されて宿泊先に向った。

学生は翌日から英語集中プログラム（Intensive English Language Program）に参加。具体的には履修登録、3日目のプレースメント・テスト、4日は前日のテストの結果が張り出され、学生は決められたレベル別のクラスで受講するようになる。そして2週目は実質的に授業に集中できるようになっている。

午後や週末は様々な課外活動を大学は準備してくれた。留学生のためのバーベキュー・パーティ。第2次英米戦争の激戦地フォート・ジョージとビクトリア朝の建物が残っている美しい街ナイアガラ・オン・ザ・レイク。ワイナリーへの見学。夜景の美しいナイアガラ。第2週の週末はバスでトロントへの日帰り旅行。

そしてあっと言う間に19日（金）に試験と終了式を迎えブロック大学での研修は終わった。20日（土）ホスト・ファミリーと別れを惜しんだあと出発。日本時間9月21日午後5時過ぎに成田空港に、その後直行便に乗り継いで午後7時過ぎ無事千歳空港に到着し、このプログラムは終了した。

参加した学生はこのプログラムに満足していたようである。引率の立場からみても概してよくできたプログラムであると感じた。学生としてはカナダという英語圏の土地で、カナダ人の教師に英語を習い、他の留学生と会話をした事は日本では得られない学習経験といえる。またホームステイ先での生活は、衣食住の様々な局面や家族の関わり方など、日本とは異なる文化・習慣を直接知る得難い生活経験となったのではないだろうか。

IELP を終えて

1 部 2 年 英米文化学科　**藤田久美子**

時間に余裕のある 2 年生のうちに様々な経験をしたい、という思いから今回の国際文化演習に参加しました。

渡航やホームステイは初めてではなかったのですが、出発前は胸をふくらませるばかりでした。ホームステイ先に着いたとき、すでに 2 人の留学生がいて驚きましたが、とても心強かったことを覚えています。一緒に登下校をしたりご飯を食べたりしました。3 人で迷子になったりもしましたが、とても楽しい思い出ができました。

高校や大学でも、ネイティブの先生による英語の授業は受けてきましたが、IELP という環境は、これらの授業と似ているようで全く違う英語学習の場でした。IELP のクラスは、初日のテストの成績に応じて決められるため、同じレベルの人たちと勉強することができ、とてもいい刺激になりました。それと同時に、これからの課題が見えてきて、英語学習のモチベーションがより一層高まりました。お互いが助け合って授業を進めていて、とても雰囲気がよく、楽しく 3 週間を過ごすことが出来ました。プログラムの関係上、欠席しなければならない授業があったことが残念ですが、貴重な体験ができました。帰国後受けた TOEIC でスコアを伸ばすことができ、英語力が少しでも伸びたことが数字となって表れたので、とても嬉しかったです。

勉強ばかりではなく、Activity も充実していました。ナイアガラやトロント観光、ワイナリーなどのカナダならではのものから、ボウリングや映画鑑賞、バーベキューまで、たくさん用意されていました。

不安なこともありましたが、カナダでの 3 週間はあっという間に過ぎてしまいました。振り返ってみて、とても意義のある濃い 3 週間だったと思います。日本でも英語は勉強できますが、海外に行って生きた英語に触れて勉強するのとでは全く違うということを改めて感じました。この研修で得たものを、これからの英語学習につなげたいと思います。

カナダでの素敵な出会い

１部３年 英米文化学科　**松井　　遥**

去年の夏、カナダにプチ留学しました。行きの飛行機は揺れるし眠れないし不安でいっぱいでした。対面の時も私の名前は最後まで呼ばれず、友達が皆いなくなり、出来ることならすぐにでも日本に帰りたいと思いました。ようやく名前が呼ばれ安心しましたが、ホストファミリーは黒人の方だったので少し驚きました。

しかしそんな不安な気持ちは一瞬でなくなりました。

ホストファミリーは母と娘の２人家族で、プラス私の生活が始まりました。娘のナキーシャとは歳も近く毎日遅くまでいろいろな話をしました。彼女もブロック大学に入学したばかりだったので２人でバスマップを広げてバスを確認したり、芸能人のゴシップや流行ってるブランド、家族や恋の話……国籍や人種は違っても考える事や興味のある事は同じなんだなと嬉しくなりました。お母さんのアリーシャと毎晩のように一緒にお酒を飲んでいろいろな話をしました。時には人種問題などについても話しました。彼女は私の疑問にいつも答えをくれたし、とても親身になって相談にのってくれたりもしました。

学校でもクラスに同じ学年の日本人がいなかったこともあり、すぐに友達を作る事が出来ました。クラスの大半は中国人で、サウジアラビア人や韓国人がいました。訛りが強くて最初は戸惑いましたが、お互いの国の言葉を教え合ったり、楽しく会話する事が出来ました。時には授業中話しすぎて先生に注意されてしまったりもしましたが、日本の大学とは違った雰囲気で授業を受ける事が出来ました。

３週間という短い期間でしたが、ナイアガラの滝やトロントなどいろいろな場所へ行けたし毎日が新たな出会いと発見に満ちていてホームシックにかかる暇などありませんでした。また日本の良さも再認識する事が出来ました。帰国後は前より積極的に英語で発言できるようになれたと思います。カナダでの生活は英語を学ぶことの大切さや楽しさ、コミュニケーションを取ることの重要さを教えてくれました。この貴重な経験を今後の生活に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

カナダでの充実した三週間

１部２年 英米文化学科　**渋谷　優衣**

北海学園大学に入学した時から、カナダ・ブロック大学での海外研修に参加しようと決めていました。私は今回が初めての海外だったので、行くまでは不安でいっぱいでした。

ホストファミリーとの初対面はドキドキでした。言おうと決めていた英語のフレーズをいう間もなくホストマザーに歓迎のハグをされ、すぐにホストファミリーの家へと連れていかれました。私のホストファミリーはとても親切な夫婦で、私をレイク・オンタリオやドライブそしてアイスホッケー観戦にも連れて行ってくれました。犬の散歩に一緒に行ったり、カナダのオーディション番組をクッキーを食べながら見たりと一緒に過ごす時間を出来るだけ持ち、英語をたくさん聞いたり、話したりしながら思い出をたくさん作りました。

研修では、Activity が毎日のようにありました。Activity がない日も自分たちで活発に行動しました。ナイアガラの滝は壮大でした。また滝の周りは可愛い建物でいっぱいで、毎週行きました。トロントにも二回行きました。最初は友達数人とメジャーリーグの試合観戦に行きました。ロジャース・センターは本当に大きく圧倒されました。二回目は Activity の中で、CN タワーやロイヤル・オンタリオ博物館に行きました。Activity は主に北海学園生での行動になります。私たちは日本人同士で居る時も英語だけしか喋らないように心掛け、英語を使うようにしました。

IELP の授業は、色々な国の人がいました。クラスメイトのみんなとはお互いの国の言葉を教えあったりしました。大学で中国語の授業をとっているため、中国人のクラスメイトと中国語で少し会話をしました。自分の中国語が通じたときは嬉しかったです。

行くまでは、三週間も海外にいるなんてとても心配でしたが、あっという間に過ぎてしまいました。私にとってこの三週間は本当に貴重な体験でした。もっと英語をしゃべれるようになりたいという気持ちを研修を通してより強く持つことができました。この気持ちを持続し、学習していきたいです。

最高の３週間

１部２年 英米文化学科　宿村　友美

このブロック大学のプログラムには入学当時から興味があり、参加したいという気持ちが強くありました。しかし、２年生以上しか参加できない為、2008年９月にやっとその夢が実現しました。

私たちはIELPというプログラムに参加し、他国の学生と一緒に朝8時から14時まで授業を行いました。授業では、先生方がクラスの人と話す機会を沢山与えてくれたので、クラスの皆と仲良くなるのにそう時間はかかりませんでした。また、授業の後には様々なアクティビティーがありました。ワイナリーに行ったり、バーベキューをしたり、ナイアガラの滝に行ったり……毎日が過ぎるのが本当に早く感じました。そんな中でも合間を見つけて、友達とナイアガラにクルーズをしにいったり、トロントにMLBを見に行ったりと、本当に中身の濃い３週間を過ごしました。

出発前に日本で何度か行われる説明会で、私のホストファミリーは75歳のドロシーという女性１人であることが知らされていました。私のおばあちゃんよりも年上、しかも常に一対一……どんな話をすればいいんだろう、とそのことが私の不安の種でした。しかし彼女はそんな不安をすぐにかき消してくれました。彼女は私より早く起き、ある日は友達とお茶をし、ある日は教会に行って歌を歌い、もちろん車だって運転するというとてもアクティブな人で、私の母親より若いのではないか、と感じさせるほどでした。また、ドロシーは食事の際には、私との会話をとても大切にしてくれました。たった３週間で私は彼女をカナダの母、と慕うほど好きになりました。ドロシーの愛犬シャローともすごく仲良くなりました。彼女との一対一の生活、朝・夜の会話が私にとっては英語力向上に一番大きな影響を与えてくれたと思います。

カナダでの３週間のあと、授業に取り組む姿勢も変わりましたし、帰国後に受験したTOEICでは150点以上も点数アップをすることができました。これからはカナダでの生活で上達した英語をもっと成長させる為の学習に取り組んでいこうと考えています。そして今、このプログラムに参加しようと考えている皆さんには、是非参加して沢山の経験をして欲しいと思います。

ロシア語弁論大会で優勝

2008年11月22日（土）、北海道庁赤レンガ庁舎において、日本ユーラシア協会北海道連合会、サハリン州行政府、北海道の3者の主催により、第40回全道ロシア語弁論大会が開催された。Aクラス（5分間スピーチ、質疑応答、詩の暗唱）とBクラス（3分間スピーチ）に分かれて、参加者20名（大学生13名、一般7名）が自分の思いをロシア語でスピーチした。

本学からの参加者5名（Aクラス2名、Bクラス3名）は、Aクラス優勝の経済学部4年の永田麻梨絵さん、Bクラス優勝の人文学部3年の吉田伶衣さんをはじめ、5名全員が日頃の学習の成果を発揮して、堂々としたスピーチを披露してくれた。このうち、人文学部日本文化学科3年生の吉田伶衣さんは、「私の心はいっぱいなのに」という題でスピーチを行った。吉田さんは、昨年の8月から9月にかけて、約5週間のロシア・ヴラヂーミル大学での短期留学（バルト3国とフィンランドのオプショナルツアー付き）に参加したが、その時の感想を次のような趣旨で語った。「自分の感動を言葉で言い表すのは難しい、感動のすべてを語り尽くした時はじめて自分のロシア留学が終了するのであろう」

ところで、今回の好成績は、学生達の努力の成果であることは言うまでもないが、熱心なご指導をいただいた人文学部非常勤講師のエレーナ・ヘインズ先生に負うところも非常に大きい。ヘインズ先生は、本学の非常勤講師として、1999年4月から教鞭をとられてきたが、今年度を最後に故郷のロシア、ノヴォシビルスクに戻られる。ヘインズ先生は、熱心かつ親切に授業を展開されるだけでなく、教科書作成、弁論大会の指導、ロシア語教育に関する論文の発表等、幅広く活躍されてこられた。特に、弁論大会では、親身なご指導により、ここ5年間では、3名をAクラス優勝へ、2名をBクラス優勝へ導いていただいた。この場を借りて、感謝の意を述べたい。そして、ヘインズ先生のノヴォシビルスクでのご活躍をお祈りする。（寺田吉孝）

吉田さん　ヘインズ先生　永田さん

吉田さん

出場した北海学園大学生5名といっしょに

Essay

「読む」ことと「書く」こと

英米文化学科教授　**安酸　敏眞**

人間は「理性的動物」（animal rationale）であると言われる。人間についてのこの定義は、通常アリストテレスに帰されるが、アリストテレス自身はラテン語で著述したわけではないので、このラテン語はギリシア語からの翻訳であることがわかる。アリストテレスの原典に遡って考えると、animal rationale のもとになっているのは、ギリシア語の ζῷον λόγον ἔχον である。「ゾーオン・ロゴン・エコン」というのは、「言語をもっている動物」、「言葉を発することのできる存在」というほどの意味である。ギリシア語の「ロゴス」（λόγος）は「言葉」も「理性」も意味するので、「ゾーオン・ロゴン・エコン」が animal rationale と翻訳された理由もわからないでもない。ともあれ、「理性的動物」という人間の古い定義のなかに、人間存在にとって言語がいかに本質的であるかが暗示されていることは、意味深長であるといえよう。

カッシーラーによれば、言語は人間における最高の象徴機能である。動物の場合には、ユクスキュルの『生物から見た世界』に示されているように、外界からの感受とそれに反応する機能的連関は本能によって直結し、一般的な定型的な反射として与えられている。ところが人間においては、感受系と反応系との間に、シンボリック・システム（象徴系）という新たな機能がつくられ、反応は思考過程の介入によって中断され遅延せしめられる。この遅延は実際には偉大な進歩であって、人間はこれを通してとくに言語によって織りなされる文化の世界を形成する。そこから彼は人間を animal symbolicum（シンボルを操る動物）と定義した。いずれにせよ、言語は《音声》と《文字》という「記号」体系を通して「意味」を伝達している。記号は物理的であるが、意味は精神的である。そして意味を運んでいる記号こそが、「象徴」（シンボル）である。人間言語がもっているこの象徴機能は、神話、宗教、言語、芸術、歴史、科学といった人間の文化的営みのなかに、さまざまな仕方で見てとることができる。

メルロ＝ポンティは、「思考は言語に住みついており、言語は思考の身体である」と述べている。そうだとすれば、思考の変化は言語の変化を惹き起こし、逆に、言語の変質は思考の変質を暗示する。言語と思考のこの共生（シンビオーシス）を理解もせずに、国際化の時代だから幼時から英語を教えるべきだとの主張は、まさに愚の骨頂であろう。グローバルな時代の地球の住人として、英語をネイティブのように操ることができれば、それに越したことはない。しかし国籍不明の国際人となるよりは、自国の言語と文化をしっかり学び、国際的に通用する日本人になることの方がより大切ではなかろうか。戦後六十余年、流暢な英語を喋って国際的な舞台で活躍する日本人も増えたが、その反面でいまや一般の日本人の内面において、深刻な異変が起こりつつある。伝統文化が外来の物質文明に蝕まれるなかで、われわれ日本人の精神と思考は著しく劣化し、悍しいほどに軽佻浮薄になっている。国権の最高位にある者の乱暴な物言いや、目を覆うばかりの軽薄さは、麻生太郎という個人の資質や教養の問題を超えて、国民全体におけるある

由々しき精神的劣化を象徴的に示している。

空気や水と同様、言語は人間生存のエレメントである。魚から水を取り去ると、魚が死ぬように、人間から言語を取り去ると、人間らしい生活はなくなる。話し相手を必要とするのは何も孤独な老人とは限らない。いまのこの国には、毎日何十通、ときには百通以上ものメールのやりとりをする多くの若者がいるという。彼らもまた言語を介した人間的な触れ合いに飢えているのである。しかし水質の悪化が魚の生態系を壊したり、生存を危うくしたりするように、言語の混乱や不正使用はやがて健全な思考の働きを阻止する。その意味で、英語教育以上に国語教育こそが喫緊の要事であろう。

ところで、言語には「聴く」「話す」「読む」「書く」という四つの機能がある。母国語であれ外国語であれ、言語をマスターするためには、この四つの技能を習得しなければならない。人間はこの四技能を、一般的には、「聴く」「話す」「読む」「書く」という順番で身につける。mother tongue と言われるように、われわれは母国語に関しては、赤ん坊のとき母親が耳元で話す言葉を聴いて、やがてそれを真似て話すようになる。このように「聴く」と「話す」は連動しているが、「読む」と「書く」は必ずしも「聴く」「話す」に連動しない。わが国は識字率が非常に高くて「文盲」と呼ばれる人は少ないが、ヨーロッパやアメリカなどには illiterate な、つまり読み書きのできない人がかなり多いという。illiterate を辞書で調べると、“unable to read or write; *broadly* having little or no education”と記されている。ここからもわかるように、「聴く」「話す」は人間社会のなかでおのずから身につくが、これに対して「読む」「書く」は一定の教育を受けないと、身につかないもののようである。

それでは、「読む」と「書く」の間にいかなる関係があるのだろう。音声としての言語の場合、「聴く」は「話す」に先行する。文字としての言語の場合、同様に、「読む」は「書く」に先立つ。みずからの内面から言葉を紡ぎ出す天才的詩人は別として、一般的には、良い文章を沢山「読む」ことが良い文章を「書く」ための必須条件である。近頃の学生の文章力のなさは、読書量の激減と読む本の質の低下に起因していると思われる。

専門の関係上、筆者はこれまで比較的多くの外国語に挑戦してみた。英語、ドイツ語、ギリシア語、ラテン語、ヘブル語、フランス語、韓国語、しかし一つとしてものにできたものはない。最後の三つはまったく駄目で、挑戦する意欲ももう消え失せた。英語は何とか実践的用途には役立つものの、完璧に使いこなすというにはほど遠い。ドイツ語は読むには困らぬものの、これまた「聴く」「話す」「書く」となるとおぼつかない。ギリシア語はプラトンと新約聖書を、ラテン語は教会教父を読めるまでになったのに、五年間の海外留学中に読むことを怠ったところ、まさに元の木阿弥! 見事に読めなくなってしまった。研究の必要上、目下、古典語能力の回復に懸命の努力を傾けているが、一度忘却の底に沈んだ文法の知識は容易には甦えらない。まさに「少年老い易く学成り難し」である。

いささか自嘲気味な繰り言になってしまったが、言語の四技能のなかでやはり一番難しいのは「書く」ことではないかと思う。あるとき知人からラテン語の祝辞を書いてくれるよう頼まれて辟易したが、辞書と文法書を片手にラテン語の文章を判読できる人も、ラテン語で詩を書くとなるとまずお手上げのはずである。学生時代にラテン語を教わった水野有庸先生は、ラテン語で自作の詩集を出すほどの達人だったが、これはまったく異例中の異例といってよい。いずれにせよ、「書く」ことが一番難しいとすれば、その能力を少しでも磨くために、優れた書物を多く「読む」ことに努めなければならない。一流のシェフになるためには、まず一流の味に触れなければならないように、美しい文章を「書く」ためには、古典とか名著と評される書物をまず「読む」ことである。このことは日本語だけでなく外国語にもあてはまる。そうであるとすれば、英米文化学科の「専門演習」において、英書を「読む」訓練がもっとなされるべきであろう。

ゼミ室紹介

1部 英米文化学科
桑原ゼミナール

――好奇心と行動力を――

英米（欧米）文化を「精神と日常の窓」を通して切り取る作業をするゼミです。欧米文化を見る眼を日常に向け、何事にも好奇心を失わず、経験的に実感できるところから文化の地平を掘り起します。学生個人の主体性を尊重し、自ら問い、自ら思考し、自ら問題を検証する、そうした自主性を基礎として構成されるゼミです。

今年度（2008年）4年生にゼミ紹介と卒業研究に至る道のりをお願いしました。

●今井　沙織

三年生になって日本文化学科から英米文化学科に転学科した私にとってどのゼミに入るかを検討することは難しいことでした。ゼミの先生達も授業を取ったことのない先生ばかりで不安の多い中、桑原ゼミに決めたのは研究室を訪問したときのことです。卒業論文のテーマを今まで一度も考えたことのない私の不安は消えました。何よりも「学生の意見、自主性を一番にして教員はそのサポートに徹するだけです。だから自由に意見をどんどん言ってほしい」という先生の言葉はこれからゼミ、ゼミ発表、卒業研究論文と二年間にわたるゼミ活動の意欲を沸かせてくれました。そして私は留学を通して興味を持った分野を卒業研究のテーマとし、自分の実体験を基礎として書いていて「楽しい」と思えるものに出会うことができました。私はこの感覚こそが大学ならではの良さではないかと思っています。「自分の興味があるものをとことん研究でき、追及していく楽しさ」これを発見できたことをこの大学四年間の一番の喜びだと思っており、私の今の財産でもあります。それは「私らしさ」の発見でもありました。先生の期待通りの研究結果を残すことは出来なかったかもしれませんが、私は大学に入って良かったと思える素晴らしいゼミ、そして大学生活だったと思っています。大学生活を充実させられるかどうかは「興味を持つものに出会えるか」

「そしてそれを追及することをサポートできる環境がそこにあるか」だと思います。

●山崎　祐佳

私は日本以外の国へ行ったことがありません。生まれてきてから今までずっと、小中高と、北海道で生活してきました。そんな私が北海学園大学の英米文化学科に入学し、4年間英語中心の勉強を続けてきました。3年になり、初めてのゼミ。自分なりの発表、聴き手側からの質問、いつもの授業よりもスラスラ喋る自分がいました。ずっと日本で生活してきたくせに、このゼミはなぜか外国の大学の授業のような感じがしました。とても自由な授業だと感じたからです。初めて授業の楽しさを知った時間でした。短い時間だったけれど、とても楽しい時間を過ごせて本当によかったと思います。

●福島　怜羅

「なぜズボンは男女ともに着用するのに、スカートは女だけなのか。」近頃、老若男女問わず、おしゃれを楽しむ人が増えている。スカートはある例外を除いて、現在、「女特有の」もの、または「女らしい」もの、とされています。しかしズボンは男女ともにはいています。それでは一体何故、服装にはこのような性差があるのだろうか、と疑問に思い、服装の性差を研究対象として選びました。調べてみると、スカート以外にも女性差別のものがあったり、また、女性のズボン獲得までの経緯を学べたりと、とても興味深いものになりました。

●森　　弘行

このゼミで私は以前から興味のあった「哲学」を学んでみようと思い、古代西洋哲学史にテーマを絞り、学んできました。はじめて学ぶ哲学は難解ではありましたが、それでも新たな発見も多く、学ぶことの楽しさをしりました。また、このゼミでは月に何度かの発表の機会があり、先生のアドバイスや他の学生からの質問によって自分の絞ったテーマをより深く学ぶことができました。

●山崎未来美

私は、カナダの留学先で多国籍の留学生たちとコミュニケーションを図った際、各国による独特の訛りや声の大きさ、そしてアイ・コンタクトの仕方など非言語コミュニケーションにおいて大きな文化の違いを感じました。そのことがきっかけで、言葉以外のコミュニケーション方法である非言語コミュニケーションとその文化の違いに興味を抱くようになりました。研究の結果、言葉よりも視線や体の動き、表情といった非言語メッセージの方が、他者へ感情が伝わりやすいということでした。しかし、非言語コミュニケーションは、文化によって異なることが多いため、誤解を生むことにもなり得るので相互理解をすることが不可欠であると思います。

●蒲生　拓也

卒業研究を始めるにあたって、一番最初に時間がかかることといえば、やはりテーマを決めることではないかと思います。私もそうでした。大学の図書館に何日間も通い、いったいどんなテーマを自分が興味を持って取り組んでいくことができるか、ということを考えました。じっくり時間をかけて考えてみれば、必ず自分の関心にあったテーマを見つけることができると思うので、あせらずじっくり考えてみることが一番大切だと思いました。

第 16 回市民公開講座報告

平成 20 年度の人文学部主催による公開講座が、10 月 25 日から 11 月 29 日までの 5 回にわたって開催されました。今回のテーマは、「文学の海を越えて」というもので、人文学部の英米文化・日本文化の専任教員 5 名がそれぞれの専攻・専門分野から、まさに広大な海のような広がりをもつ文学の世界を、横断的にあるいは越境的に講演を行いました。今年の受講生は例年より少なめの 20 名を下回りましたが、その分、毎回の欠席も少なく熱心に聴講しており、授業後の質疑応答も活発なものがありました。講座終了後のアンケートでも非常に熱心な様子が伝わってきています。中には「時間が 90 分では短すぎる」とか「一日 2 回やって欲しい」というような意見までありました。

講座の内容と担当者・テーマは以下の通りです。

第 1 回　文学と民族闘争　―アイルランドの場合―　川上武志教授
第 2 回　文学から映像への越境　―アメリカ文学と映画化作品の関係を考える―　本城誠二教授
第 3 回　モダニズムの詩人エリオットと伝統
　　―「鏡」は何を映したか―　池内静司教授
第 4 回　ジャンルの横断　―詩歌の海、散文の海―　田中　綾准教授
第 5 回　東西における近代文学の情緒・感情・感性について
　　―海にまつわる情緒の受容と変容―　テレングト・アイトル教授

人文学部主催での公開講座は、本学の中でも最も古い歴史を有するものですが、残念ながら単独での開催は今回が最後となる予定です。来年度からは北海学園大学としての公開講座が予定されています。

大学院の窓

チャンス&チャレンジ

文学研究科　英米文化専攻　修士課程 2 年　**水口美知子**

以前は考えてもみなかった大学院に入学させていただいた。2 年前のことである。1 年目はいろいろな講義を受講し、目から鱗の世界に浸っていた。久しぶりの学生生活でルンルン気分であった。ところが 2008 年の声を聞くや否や、論文という 2 文字が目の前にちらちらしてストレスとチャレンジの毎日であった。

私の論文のタイトルは「発展途上国におけるグローバル化の影響」である。100 以上ある途上国を全て取り上げる事は不可能で、IT 産業に沸くインドと、スリランカを取り上げた。スリランカには 2004-2006 年に JICA のボランティアとして滞在した。といっても当時、本論文に関する問題意識を持って生活していたわけではない。

1）論文を書いた経験がほとんどない。
2）仕事をしながらなので時間がない。
3）英語で書く、という三重苦であった。

先行研究、グローバル化の推進役である多国籍企業、インドとスリランカのケース・スタディと、調べれば調べるほど、深みにはまっていった。私たちが毎日食べているもの、飲んでいるもの、着ているもの、身の回りの出来事に目を向けると、自分とは関係がない、遠い所の問題と思われていた搾取工場、児童労働などの深く重い問題がのしかかってきた。どんどん広がっていく研究分野に追いつけず、結局消化不良の状態になってしまった。だが、この 2 年間は非常に有意義であった。誰にでも与えられるチャンスではない。環境が整わなければ、社会人になってから大学院に入学して研究に打ち込むことなど出来ない。多くの文献に触れることができた。若い学生さんたちが対等に（と、私は思っているが）付き合ってくれた。

おばさんの私を受け容れてくれた大学、忍耐強くご指導くださった先生方、同窓の友人たちに感謝している。私を送り出し、応援してくれた家族にもお礼を言いたい。今後もチャンスを活かしチャレンジ精神で生きていきたい。

■学会・研究発表

常見　信代

「ポスト・ローマ期の教会組織をめぐって：研究動向」9月、「中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会」、大阪大学

安酸　敏眞

「キリスト教理解とその方法について」6月、日本基督教学会北海道支部会、北海学園大学

須田　一弘

“An ecological study of the regional development and its impacts on the Orang Asli communities in Terenhhanu”, 10月、Persidangan Perdana Pribumi Malaysia, Malaysia Darul Iman University, Kuala Terengganu, Malaysia.

濱(浜)　忠雄

「ハイチ革命と『西半球世界秩序』」9月、日本アメリカ史学会第5回年次大会シンポジウムA「19世紀前半の西半球世界観」、東洋学園大学

土屋　　博

「情操と知識の間」9月、日本宗教学会第67回学術大会パネル（主題「宗教的情操教育をめぐる諸問題」）発題、筑波大学。

（12月、日本宗教学会『宗教研究』358号に要旨掲載）

（12月、日本学術会議『学術の動向』153号に要旨掲載）

上野　誠治

「英語の学びと文法―英語の語順について」11月、第40回上川・旭川地区中学校・高等学校英語科連絡合同研究会、北海道旭川西高等学校

追塩　千尋

「弁暁と東大寺再興」8月、第24回北海道印度哲学仏教学会大会、北海学園大学

■著作・論文など

安酸　敏眞

「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』――翻訳・註解（その1）――」7月、『北海学園大学人文論集』第40号、北海学園大学人文学部、1-58頁

「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』――翻訳・註解（その）――」12月、『北海学園大学人文論集』第41号、北海学園大学人文学部、53-94頁

寺田　吉孝

「ロシアの地名について（1）―ヴラヂーミル市のゴドニーミヤ годонимия の形成過程に関する問題―」9月、『開発論集』第82号、北海学園大学開発研究所

土屋　　博

「日本における宗教教育の公共性――『宗教的情操』をめぐって――」12月、北海学園大学『学園論集』138号

追塩　千尋

「平安期の神の機能について―『今昔物語集』巻19の第32話を中心に―」7月、『北海学園大学人文論集』第40号、北海学園大学人文学部

「弁暁と東大寺再興」10月、『印度哲学仏教学』23号、北海道印度哲学仏教学会

田中　　綾

『北海道の出版文化史』(共著)11月19日、北海道出版企画センター

「歌人・逗子八郎研究――文芸エリート及び厚生運動の視点から――」（一）11月、『北海学園大学人文論集』第41号、北海学園大学人文学部、124-142頁

桑原　俊一

「文字から探るフェニキア語の世界」12月、『月刊　言語』Vol.37・No.12、大修館書房

テレングト・アイトル
「近代の衝撃と海――鴎外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチョンガによって表象された『海』――」(中一続Ⅰ)7月、『北海学園大学人文論集』第40号、北海学園大学人文学部

■講演など

大谷　通順
「中国の伝統ゲーム～『骰』と『牌』の背景にある原理」、3月、第7回札幌大学孔子学院講演会、sapporo55ビル（札幌市）

井上　真蔵
「カナダと日本の交流」、11月、さっぽろ市民カレッジ平成20年度秋講座、ちえりあ札幌市生涯学習センター

■評論・エッセイなど

安酸　敏眞
（書評）石川明人『ティリッヒの宗教芸術論』（北海道大学出版会）、9月、『基督教學』（北海道基督教学会）第43号、33-38頁
（書評）フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ著、野崎卓道訳『プロテスタンティズム――その歴史と現状』（教文館）、10月、『本のひろば』第608号、2-3頁

小野寺靜子
（エッセイ）「古典散策　万葉集巻四・六五一～六五三」『芸林』71-7、2008年7月
（辞典）国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所編『万葉集神事語辞典』2008年6月、「敷島」「神が門」「織女」「彦星」「相撲」

土屋　博
「ファミリズムとキリスト教」12月、コルモス・シリーズ第54回研究会議（主題『ファミリズムの再構築――宗教から家族を問いなおす――』）報告書、現代における宗教の役割研究会発行。

桑原　俊一
（エッセイ）「欧米文化の窓一古代メソポタミア文化との対話の愉しみ」9月、『豊平会報』61号

田中　綾
（書評）加藤孝男著『近代短歌史の研究』（明治書院）2008年3月、『短歌往来』8月号◇「『心の花』歌人論――大野道夫論」『心の花』創刊110年記念号◇「竹山広の戦争詠――被爆体験の語り方」『歌壇』8月号◇「シンポジウム記録『歌は何を殺したか？』」『現代短歌研究』第7集◇「菱川善夫さんを偲ぶ」『労仂文化』211・212号◇「滋味ある掘り起こし作業」『歌壇』11月号◇「選評〈評論〉」『さっぽろ市民文芸』25号◇道内文学・短歌『北海道新聞』夕刊6月23日◇同8月7日◇同9月2日◇同9月22日◇同10月28日◇同11月26日◇同12月24日◇歌壇選・今月の歌『朝日新聞』道内版　7月3日◇同7月17日◇同7月31日◇同8月21日◇同9月4日◇同9月18日◇同10月2日◇同10月16日◇同10月30日◇同11月13日◇同11月27日◇同12月11日◇同12月25日◇同12月27日

■研究費

須田　一弘
総合地球環境学研究所平成20年度インキュベーション研究、「開発と自然・社会環境変化に対する移民・流動人口・難民の生活適応と環境影響」

■その他

寺田　吉孝
第40回全道ロシア語弁論大会審査員、2008年11月、日本ユーラシア協会北海道連合会・北海道・サハリン州政府主催、北海道庁赤レンガ庁舎

大谷　通順

（代読）丸尾常喜「魯迅『吶喊』自序を読む」（急逝した恩師丸尾常喜先生の遺言に従い、公開講演のために残された口述原稿を整理

（代読）第 57 回東北中国学会、5 月、北海道大学文学部

（司会）札幌大学孔子学院開学 1 周年記念国際シンポジウム、第 3 部「会場討論」、6 月、札幌大学 6 号館

田中　　綾

鼎談「続・雑誌『兵隊』を読む」（石田一郎、大濱徹也両氏と）『刀水』11 号◇現代短歌研究会、第 8 回シンポジウム「開会の辞」、9 月 6 日、北海学園大学◇第 6 回全道高等学校文芸研究大会・外部審査（短歌）、10 月 2、3 日、洞爺サンパレス

編集後記

ブロック研修を初めとして、ゼミ紹介、大学院の紹介、公開講座、エッセイ、ロシア語弁論大会など様々な内容の原稿を寄せていただき、ありがとうございました。十分に楽しんでいただけるものになったと思っています。（井上　真蔵）

前号の編集からもう半年も過ぎてしまいました。

時間の経つのが早く感じられます。今回も多くの方々のご協力をいただき無事発行することができました。これからもよろしくお願いいたします。（菅　泰雄）

人文フォーラム30：2009年３月６日発行　編集人：井上　真蔵、菅　泰雄　発行人：追塩　千尋
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161）　印刷：㈱アイワード

表紙「ケリ方名キロ・褌子方名ヲモンベ」図
彩色、26.7×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』乾　所収。北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永 9［1790］―天保 15［1844］）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化 5（1808）年から翌年にかけて、宗谷の対岸シラヌシに渡り、東海岸はタライカを経て北知床岬まで、また西海岸を北上して間宮海峡を確認、さらに北端に近いナニヲーまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵、乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界余話』と題し幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政 2（1855）年刊の流布本『北蝦夷図説』を始めとして、多くの傳写本がある。

この図について本文には、「冬月の頃犬皮の衣を服し水豹のケリをつけ……」「極寒の地なるが故に島夷長少となく総て魚獣皮を以て褌子脚絆革履の類を製着す」と記述がある。図中の「ケリ」はアイヌ語で「靴、履物」を指し、その優れた製法と装飾性は、現今流行のブーツファッションに通じるものがある。

「褌子」について高倉新一郎［元本学学長］は、その著『挿画に拾う北海道史』（北海道出版企画センター　1987）において、「ヲモンベ」は明らかにアイヌ語の「股引」を意味しており「褌［＝褌］子はフンドシまたは下袴の意である。（中略）図から見ると犬の毛皮で製つた筒で、紐がついている。恐らくはこれを腿にはいて、紐で腰帯に結びつけたのだろう。」と説明している。

本学図書館所蔵『東韃地方紀行』（請求記号 081/TO82　東洋文庫 484）には、内閣文庫所蔵『北夷分界余話』と一連の資料が翻刻されている。

（北駕文庫　佐々木光子記）